71

氏名(生年月日)	菅沼信也（スガヌマシンヤ）
本　　籍	
学位の種類	博士（医学）
学位授与の番号	乙第2312号
学位授与の日付	平成17年3月18日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当（博士の学位論文提出者）
学位論文題目	**膜性ループス腎炎の臨床病理学的検討**
主論文公表誌	東京女子医科大学雑誌　第74巻　第12号　680-689頁　2004年
論文審査委員	（主査）教授　二瓶　宏
	（副査）教授　小林　槇雄，大澤真木子

論文内容の要旨

〔目的〕

膜性ループス腎炎（MLN）はSLE（systemic lupus erythematosus）腎症の1つで比較的稀な組織型である．新しいループス腎炎組織分類では，pure or minimally proliferative MLNをclass V，50%以下の糸球体に活動性病変等が加わるとclass V＋class IIIとしている．

MLNの病態を明らかにするため，class V（V群）とclass V＋class III（V＋III群）を比較検討した．

〔対象および方法〕

SLE患者で，腎組織型V群18例，V＋III群7例の計25例（平均年齢32.3±10.3歳，男性1例，女性24例）を対象とした．腎に関連する臨床病理学的所見，SLE疾患活動性指数（SLEDAI），免疫学的検査所見を評価した．

〔結果〕

MLNは尿異常で発見される発症様式の腎症先行型がSLE先行型より多かった．電顕所見上，腎症先行型はdensityが異なる基底膜上皮下沈着物を認めるheterogeneous deposit typeが，腎症SLE同時型は沈着物のdensityが均一なhomogeneous deposit typeが高率だった．

ネフローゼ症候群は56%に認め血尿は軽度で，クレアチニンクリアランス（Ccr）は平均83.1ml/minであった．V群よりもV＋III群の方が，血圧は高くCcrは低下し，ネフローゼ症候群が高頻度であった．

抗DNA抗体陰性が多く，抗ss-DNA抗体が抗ds-DNA抗体より高値であり，腎外症状を伴わないとSLEDAIも低く，平均10.8点であった．

MLNでは完全寛解を61%に認めた．腎生検後4年以上観察した20例中，腎機能低下（Cr 1.2mg/dl以上）は4例に認め，4例中3例は尿蛋白持続例だった．

〔考察〕

MLNは他の臨床所見が出現する前から存在する可能性が考えられた．電顕所見上，腎症先行型はheterogeneous deposit typeが高率であったことから，長期の間に沈着物が変化する過程が考えられる．

V群よりV＋III群は，血圧が高くCcrは低下しており，血圧管理が重要と考えられた．

〔結論〕

MLNは尿異常で発見されることや，DNA抗体陰性やSLEDAI低値で免疫学的活動性が低いことが多い．しかし尿蛋白持続例は腎機能悪化の傾向を認め，MLNにおいても尿蛋白消失を目標に治療すべきであると考えられる．

論 文 審 査 の 要 旨

膜性ループス腎炎（MLN）は比較的稀な全身性エリテマトーデスの腎症で，組織分類や臨床像でも議論が多い組織型である．

2003年のWHO腎組織分類では，増殖性病変が殆どないMLNをClass V（V群），糸球体の活動性病変が50%以下のMLNをClass V＋Class III（V＋III群）としている．MLNの病態を明らかにするため，両群の臨床像，組織像，活動性（SLEDAI）を比較検討した．

MLN全体では，ネフローゼ症候群を56%に認めるが血尿は軽度で，クレアチニンクリアランスは平均83.1ml/minであった．抗DNA抗体陰性例が多く，抗ss-DNA抗体が抗ds-DNA抗体より高値を示すのが特徴で，腎外症状を伴わない例ではSLEDAIも低値であった．完全寛解を61%に認めたが，腎機能が低下した4例中3例では尿蛋白が持続した．腎症先行例では電顕で見る沈着物の密度が一様でなかった．V＋III群ではV群より血圧が高くCcrは低下し，ネフローゼ症候群が高頻度であった．

MLN例でも血圧の管理，蛋白尿減少の重要性を示した臨床的に価値ある論文である．